

私の家族は毎年、お正月になると祖父母や親戚と共に集まって過ごすのがいつしか恒例になっていました。今年も私の家を含め、母方の四つの家族が集まって新年を祝うことができました。今回の感話のテーマは、家族や身近な人との関係を見直す、というものだったので、この機会に私が感じたことについて述べようと思います。

私には従兄弟がたくさんいるのですがその内の一人は反抗期なのか、母親の言うことを全く聞こうとしていませんでした。母親の言っていることは正しくて、その子のためを思って言ってくれていることなのに聞こうとしないのはおかしいと思いました。他者から見ればその姿はすごく幼く見えたけれどこれは自分にも当てはまるものがあるのではないかと思います。わざと聞かなかったりすることではなく、私自身が気が付いていないだけで家族や周りの人が私のことを思ってかけてくれた言葉があるかもしれないのに、流してしまう時もあったのかなと思いました。身近な人だからこそ素直になれないことや聞き流してしてしまうこともあるけれど、それは相手にとっても自分にとっても良くないと思います。

また、見ていてもう一つ感じたのは家族同士での気の遣い方です。特に祖父母はいつも度を越えて皆を喜ばせようと頑張っているイメージがあります。たまにしか集まれないからと言って孫達にこれ以上ないほど尽くしてくれるのですが、頑張りすぎて自分達が疲れてしまうことがほとんどです。だからなのか、頑張った分空回りだったりあまり喜ばれなかったりするとすごく気にします。それは今まで私が気付いていなかったことでした。他人との様子を見て急に祖父母がかわいそうに思えました。今まで自分が少しも祖父母のことを考えてこなかったことが思い知らされたので、その後祖母の料理や祖父の用事に付き合ったりと、二人のことを考えるようになりました。今まで自分は何でもしてもらって、色々任せたり頼ったりしてばかりだったけどそれも違っていたのだと思います。家族なのだから気を遣い合うなんておかしい、という人も多いとは思いますが、やっぱり家族でもある程度の気遣いは必要なのではないかと思います。

少し話がそれてしまうのですが、私の読んだある本の中では家族のすれ違いの話が書かれていました。主人公の母親が死んでから、主人公は母が生前自分に言った言葉の意味を知るという内容なのですが、これも今回私が感じたことと似ているように思います。家族ということが死角になってしまっていて気が付いていなかったことに後から気付くという所においては同じです。私はそのことに気付いてからなら、それを直すことも変えることもできます。ただこの本の場合、その家族ともう二度と会えないのでやり直しはききませんそう考えると私はこの本の主人公に比べて、幸せなのかもしれないと思います。

たくさん出来事があったけれど、この感話を書いている内に自分の感じたことが整理されて、はっきり分かって良かったです。今までの私にとっての家族はあまりに都合のよすぎるものでした。でも自分が家族の一員であるなら、してもらってばかりではなく、自分からも家族に貢献しなければならないと思うようになりました。